

角山ゼミナール

「鎌倉別館 40 周年記念 てあて・まもり・のこす 神奈川県立近代美術館の保存修復」を鑑賞して

国際日本学部 国際文化交流学科 3 年

名古屋 琉夏

はじめに

「デザインと社会」というテーマで活動している角山ゼミナールでは、文献購読や個人研究を通してデザインを歴史的に考察し、そこから対象物の分析と調査に基づきデザインの意義や社会的役割を考えている。その中で 2024 年 6 月 8 日（土）に課外授業として展覧会鑑賞を行なった。今回は、神奈川県立近代美術館鎌倉別館で 2024 年 5 月 18 日（土）から 7 月 28 日（日）まで開催された「鎌倉別館 40 周年記念 てあて・まもり・のこす 神奈川県立近代美術館の保存修復」という展覧会へ訪れた。

美術館は作品を展示し届けるだけでなく、コレクションを良い状態で保存し次世代へ伝えるという役割も担っている。近年増加している自然災害や気候変動、そして社会的要請の変化の中で作品を守る環境を整え、手当てをしながら作品を未来に残すための最善策を模索している。このような普段見ることのできない美術館の取り組みを、「てあて」「まもり」「のこす」という 3 つの言葉から紹介するのが今回の展覧会である。会場



「てあて・まもり・のこす」展の看板

では、作品の修復過程とそこで使用される道具、そして、作品を守りながら展示するための工夫などが、実際に修復を受けた作品とともに紹介されていた。

「てあて」

この部門では 1980 年代から現在までに「てあて」を受けた作品の一部が展示されていた。その中で古賀春江の《窓外の化粧》（図 1）が印象に残った。この作品で行われた作業は黄ばみを落とすことと額縁の修復であった。1992 年に修復が行われ、塗られていたニス洗浄し黄ばみを落とす。そしてキャンバスと木枠を分解しキャンバスの洗浄と木枠の交換が行われ、色が薄くなっているところに色を加えて新たなニスを塗るという作業が行われた。そして 2010 年には作品の運送中にキャンバスの揺れを防ぐために額縁の修復も行われた。

私はこの作品を最初に見たときに「色鮮やかで明るい作品である」という印象を受けた。しかし、この色合いが見られることには、先ほどのような作品の修復作業が重要な役割を果たしているということを強く認識した。



図 1. 古賀春江《窓外の化粧》
1930 年 油彩、カンヴァス
神奈川県立近代美術館蔵

「まもり」

この部門では絵画の保護に重要な役割を果たす額縁をはじめ、作品を安全に運び展示する方法や作品を守

る環境作りなど、作品を「まもり」ながら活用するための取り組みが実際の資機材とともに紹介されていた。その中で高橋由一の《江の島図》（図 2）が印象に残った。この作品は 1876-1877 年に作られた作品であり、作品だけではなく額縁もとても古いものであるため価値が高いものである。この作品は 1985 年に経年劣化による欠陥の処置が行われたため、作品自体は安定した状態にある。しかし額縁には布が貼り付けられており、その布が著しく劣化している。そのため 2009 年以降、

他の美術館へこの作品を貸し出す際にはオリジナルの額縁を模して作成された貸出用額縁をつけ、取り扱いに十分注意をしている。

実際にこの作品を見ると、額縁の布の部分が破れていたり、ひびが入っていたりする部分が多く見られた。しかしこの額縁も作品の一部として作られているからこそ、額縁を取り替えるのではなくそれを「まもる」ために新たに額縁を作成するという取り組みに感激した。このように作品を「まもる」取り組みがあるからこそ、我々は作品を鑑賞できているのだということを実感した。



図 2. 高橋由一《江の島図》1876-1877 年
油彩、カンヴァス 神奈川県立近代美術館蔵

「のこす」

最後に「のこす」部門では作品をどのように残していくのかについて紹介されていた。その中で私が一番印象に残ったものは作品の収蔵庫に関する内容である。収蔵庫は調湿機能があり作品へのあたりが柔らかな木材で作られている。しかし、木材には有機酸を放

出すというデメリットがあるため、それを放出しない人工材料と木材を併用して作品を良い状態で残す取り組みを行なっている。このことから作品を展示する環境を調節するだけでなく、数多くの作品を後の時代に受け継ぐために保存の環境に關しても様々な取り組みが行われているということを知ることができた。

また、作家が制作した作品を当時の状態を保ち、作品への介入を最小限に抑えることが修復の基本とされている。しかし、作品の性質によっては保存や修復が困難なものも出てくる。その際に、作家が存命のうちには作品の保存についての話し合いを行い、その記録を残しておくことも重要である。これらのことから作品を修復する時には、「状態を良くする」ことではなく、「制作された当時の状態をできる限り維持する」ことを最優先で考え作品を後世に「のこす」取り組みが行われていることを知った。

おわりに

現在、美術館や博物館などで鑑賞が可能である作品は、修復作業という「てあて」、作品を「まもる」環境づくり、そして、その作品を後世に「のこす」という取り組みを経て、我々のもとに届いているということを知ることができた。これらの活動は、今後増えて続ける作品にとって必要不可欠なものであり、これらの取り組みを「まもり」、「のこす」ことも未来の芸術文化に繋げるために必要であると考えた。

今回の展覧会を通して、修復作業の内容、そして作品を守り、残すための取り組みを知ると共に、その重要性を強く感じた。しかし、修復作業の後継者はいるものの、修復作業を行う場所が少なく、国からの支援も十分ではないため厳しい現状であるということを知り、今回の展覧会を企画し、実際に現場で作業を行なっている

る学芸員の橋口由依さんが教えてくれた。これを受け、この取り組みがさらに広まり作業場や支援などがさらに拡大し充実した体制が整えられることを願う。

【参考】

●「鎌倉別館40周年記念

てあて・まもり・のこす

神奈川県立近代美術館の保存修復」配布

資料

●会場解説文

【図版出典】

図1、2

神奈川県立近代美術館



野外彫刻・柳原義達《犬の唄》
(1983年)の前で

秋山ゼミナール

「横浜トリエンナーレ」

フィールドワーク

外国語学部 中国語学科3年

水上成実・塩家亜胡・土屋恵・廣田葉奈

柳沢慶介・寺崎大悟・池田亜美香・伊東美秋

2024年3月15日から6月9日まで、みなとみらい地区で開催された国際展、横浜トリエンナーレのテーマは「野草・いま、ここで生きてる(野草・我們的生生活)」である。北京を拠点にも活躍するリウ・ディン(劉鼎)とキャロル・インホワ・ルー(盧迎華)は、中国の文学者、魯迅がほぼ100年前に書いた短文集『野草』に基づいて、災害や戦争、大量消費による環境破壊など、私たちが直面している現代の状況をそれぞれの方法で捉えた作品群をキュレーションしている。私たち秋山ゼミは、5月7日にこの横浜

トリエンナーレでフィールドワークを行った。ここでは、ゼミ生8人それぞれが最も印象に残った作品について展示順に従い紹介する。

水上成実

私は横浜美術館に入ってからすぐに展示された、ウクライナの複数のアーティスト、オープングループによる『繰り返してください』が印象に残った。ウクライナ戦争で実際に聞こえる爆弾や銃弾、戦闘機を模した大きな音が館内に響き、作品名の通り、「繰り返そう」と思ったが、模倣した声から戦争や人間の怖さを感じ、繰り返し返せなかった。

「声を出してみる」という新しい形の作品をぜひご覧いただきたい。

塩家亜胡

私が特に印象に残っているのは、志賀理江子の《霧の中の対話：火—宮城県牡鹿半島山中にて、食猟師の小野寺望さんが話したこと》という作品である。この作品は、鹿猟師である小野寺さんに写真家の志賀さんが実際に行ったインタビューを、そこで撮った猟の写真と組み合わせ提示する内容になっている。作品に使われている写真は、実際の猟の様子に加え、解体の場面や処理し終わった後の無数の骨など、生々しくもリアルティ溢れるものだ。この作品には猟師の心情や、食べ物に感謝するという言葉の真の重みなど、様々な事を考えさせられるため、是非多くの人に見てもらいたい。



志賀理江子
《霧の中の対話：火—宮城県牡鹿半島山中にて、食猟師の小野寺望さんが話したこと》
(撮影：塩家亜胡)



オープングループ
《繰り返してください》
(撮影：水上成実)